

毎月一回十五日發行（定價一部五錢一年郵稅共五十錢）



和 清 山 香 兼 輯 編
會 社 刊 行 所 行 發
所 刷 印 所 刷 印

人間の自由と宗教觀

石倉 新 十 郎

自然が與へた人間自由の根柢を視るに、唯肉體の一部である腦組織及び隨意筋の活動に過ぎないのである。其れ以外の總ての機關は我が身ながら少しも自由が與へられてはゐない。試みに心臓の鼓動を止めやうと考へてみるに、恰も水車を停めると似た方法を執らなければならぬ。回轉しつつある水車を強いて吾人が止めやうとすれば、水を切つて他に放流するか、又は車が止る程の荷重を懸げなければならぬ。水を切るにも荷重を懸けるにしても、結局水車が自然停る様に人間が自身を働かせねばならぬ。換言すれば人間が自然に服従し、自然の援助で停止を結果せしめるのである。自殺は人間の自由である如く見えても、決して天與の根本自由ではない。肉體の生活現象が自然停止する結果を來すべき何かの方案を實行しない限り、死ぬ事は絶対に可能である。人間が生存する事に於ても亦同様である。呼吸するのは半隨意筋によるが、平素は其の自由を發現して居ない。食物を口に運んだり、咀嚼し嚥下するまでは自由であるが、喉頭を越せば早自然に任せて更に自由がない。斯くして吾々人間は自然に絶対服従しない限り死ぬ事も生る事も出来ないのである。誰か人間が自然を征服し得ると言ひ得るか。却つて自然は之に絶対服従する人間を援助するのが事實である。

人間自由の發展は自己を自然の存在と完全一致せしめる事から出發する。嬰兒の笑ふは嬰兒の自由から發する事象である。だから吾人が如何に笑はせやうとしても、嬰兒に笑ふ心が發せざる限り之を笑はせる事は絶対に不可能である。そこで濡れた襦袢は取り代へてやり、空腹を乳で癒してやつてから、柔和な笑ひを仕向ければならぬ。それでは猶必ずしも笑ふとは限らない。幸ひに笑へば初めて自分の自由が發展したのである。反對に嬰兒を泣かせやうとしても、嬰兒が泣く様な事象を現出せしめない限り、泣かす事は絶対に不可能である。自由を有する嬰兒をして自分の自由範圍に入れやうとすれば、自分が先づ嬰兒に絶対服従的態度にならなくてはならず、そして自分を勞して嬰兒に一致せしめ然る後に初めて發現するのではないか。

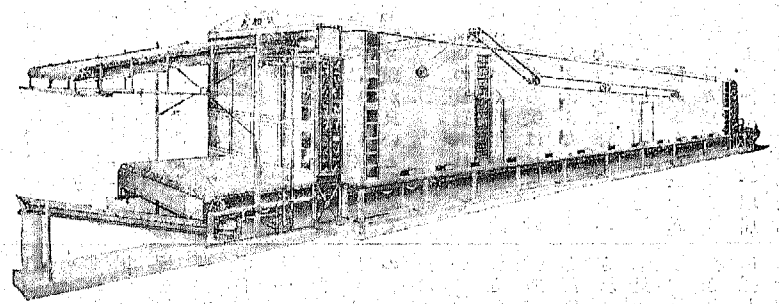
斯くして人間の自由發展の経路を案ずるに、發展の及ぶ對稱の自然的狀態に自分の方から順應一致する原理は變らないが、方法として強制と誘導との二つになる。例へば地上の石を動かすに重力と摩擦に打ち勝つ力を加へて行ふは強制であり、石の支持物を取除いて石自ら動く様に誘導である。何れによるも石は動くのであるが、其の動いた結果は同じではない。強制によれば水平以上に移動し得るも、誘導では必ず水平以下となる。嬰兒を泣かす事は強制で出来るが、笑はせるには是非誘導でなければならぬ。何れも嬰兒の感情を動かしたのであるが、結果は、泣くと笑ふとの相違となる。こう云ふ事は生物界、無生物界を通じての事實であり、眞に自然界の實態である。

以上は全く理智的觀察であつて、即ち科學的觀察である。然し自由を發展させる人間の態度はと見るに、石を動した結果がどうあらうと、石に對しては何等憐愍の心を持たないが、嬰兒に對しては全く無關心ではあり得ない。たとへば嬰兒の爲めの強制とは云へ出来る事なら泣かせたくないのが人情である。まして母心の強い程一層然りである。此の優しさ此の感情は全く人間本來にあるものではあるが、決して人間自由の發現ではない。之は天與の慈悲心であつて之を佛心ともまた神心とも云ふ。此所で明かに考へさせられるのは腦活動の一部だけが人間自由の中にある事である。自由の殿堂は意志であつて思慮はよく之に隨ふ。認識と感情は自由の外にある。意志と思慮の自由を以て認識感情に或る壓迫抑制を加へ得るは事實であるが、其の發動を如何ともする力はない。認識と感情の發動に對しては人間が絶対服従である。今認識と云ふ心理を考へてみるに、其の根柢は感覺にある。感覺は所謂五官機能の活動であ

謹賀新年
山本三六郎著
化學純絹の完成
工業的完成
伊太利纖維會編
現況原因と其
修正
蠶絲業法規要論
原野治著
市田上縣野長
會究研學科絲蠶 所行發
〔振替長野6413番〕

¥2.30 ¥1.50 ¥0.30

現代乾繭機界ノ王座 大和式自動輸送乾繭機



【各種型錄贈呈】

二五九五年代表型

製作發賣元
株式會社
大和三光商會
東京京橋區京橋三丁目二番地
電話京橋(56)五三二〇番

- 營業課目
- 特許大和式自動輸送乾繭機
 - 特許大和式自動人絹乾燥機
 - 特許帶川三光式乾燥機
 - 特許やま式乾燥機
 - 特許サンケイ式濾過淨水器
 - 特許サンケイ式廢湯吸器
 - 特許サンケイ式高壓ポンプ
 - 特許サンケイ式トランプ

つて、腦機能と自體他部及び外界現象との交渉結合である。意志思慮の自由を以て此の交渉を抑制しない限り、感覺は人間自由の外にある一つの自然事象である。故に認識の發動は自然である。

信は認識を根柢として發する心理である。嬰兒を我が子と認識する以上、我が子として絶対に信ぜざるを得ない。死後の極樂が認識し得ない以上、極樂の存在を信じ得る筈がない。信は従つて人間の自由の中にある。實に天與の事象である。而して認識は思慮の助成によつて其の範圍が擴大し、其れに従つて信の深度は高められて行く。故に人間の信と云ふものは其の根柢は自然から與へられ、人間自由を以て之を助長し得る心理である。

然し天與の慈悲心を缺いた心理を以てしては、觀望した客觀世界は唯現象ばかりの世界である。生物界は弱肉強食の闘争世界としか出現しない。そこには善悪も喜憂もなく無味荒涼の哲學世界科學世界としか現れて來ない。こゝに慈悲の感情が發動すれば人間の心理は完全となり自由の發展は自我の擴張となる。父母の愛は我が愛であり、子の喜びは我が喜びとなる。擴張して隣人の悲みを我が悲みとし、國の憂は我が憂となす。終に草木蟲魚にまで發展すれば無心の自然が佛と變る。此世界が即ち宗教世界ではなからうか。(終)

纖維工業學會創立總會及高專纖維工業教官打合せ會參加の記

香 山 清 和

我々の唯一の研究発表機關たるべき纖維工業學會は昨秋以來着々準備中の處愈々二月十一日紀元節を以て創立總會が舉行せられる事となつた。

場所は東京市丸之内有樂町蠶絲會館である。蠶絲業に關係深き我々は蠶絲會館に開催されると云ふ事は何んとなき嬉しさを感ずる。筆者も参加すべく十一日午前八時四十分上田發にて上京した。上野驛にて省線電車に乗換へ有樂町驛下車徒歩にて蠶絲會館に到着した時は定刻三時を少し過ぎてゐた。或は最早開會してゐはすまいかとの懸念も這入つて見ると杞憂である事を知つた。受付で晚餐會の會費を出して控室に入る。上田からの出席者は大抵俺一人丈だらうとあきらめてはゐたが、それでも誰か來てゐないかとナロ／＼見廻した。すると隅で呼ぶ者があ

る。田中一男氏だ。隣には濱香三氏が、そして意外にも出張中の野口新太郎氏も來てゐた。孤立無援を救はれた様な氣がしてホツとした。四人で固つて色々話すと少し経つて控室に來てゐる人を眺めると流石同商賣だ。顔見知りの人が多い。それに去年の内地留學がそれに拍車を加へてゐる。相方知つてゐる人、こつち丈知つてゐる人、大抵さうだと思つても或は人違ひの心配ある人、見覚えはあるが名前が思出せぬ人達が、ズラリと並んでゐる。二三の人々と挨拶を交す。發會式は定刻より遅るゝ事三十分午後三時半より開會する。各地よりの出席者百数十名に達しまづ菱山衛平氏(工大)の開會之辭、柴田才一郎氏議長に推され低聲なるも人を喰つた酒脱の態度にて議事を圓滑に進ませしめる。議事は太田勤治氏(工大)より事業報告があり、會期の決定、評議員百二十八名、理事十二名、監事三名の選舉及本年度より會費徴收の件を決議し此

の歴史的に意義ある創立總會も四時半無事終了した。本校よりの評議員は左の如くである。針塚 長太郎氏 石倉 新十郎氏 岡 徳治郎氏 清水 寛 孝氏 加美 好 男氏 林 貞 三氏 監事及理事は桐生二名以外は全部東京在住者である。少憩後午後五時より階下食堂に於て洋式にて懇親會を開催した。デザートコースに於て柴田氏の挨拶、次で同氏の指名に依る數氏の祝辭があつて午後六時頃散會した。加美好男氏が出席を通知され乍ら逢ひに見えなかつたは残念であつた。纖維工業學會發會式を期とし桐生高等工業學校に於て、高專纖維工業教官打合せ會があるのので筆者は同夜は上野驛前に宿泊した。明くれば二月十二日午前七時三十分の東武鐵道で桐生に向ふ。東京でバラつき出した雨は兩毛に近づくに従ひ雪と變じた。太田で電車を乗換へると車中は我々仲間と覺しき人許りである。九時新桐生下車迎への自動車にて桐生高工に至る。案内されて控室に入れば既に先着の方々もある。内田浩氏も上田より來らる。初對面の挨拶として名刺を交換する。出席者は左の諸氏である。

- 京都高工 色染科長 古城 鴻一氏
- 全 機織科長 藤野 清久氏
- 名古屋高工 紡織科長 築 源次郎氏
- 全 色染科長 大島徳左衛門氏
- 福井高工 紡織科長 新井 幸長氏
- 全 色染科長 宮岡宇一郎氏
- 米澤高工 紡織科長 頼 惟一氏
- 全 色染科長 山城 誠止氏
- 上田蠶絲 製織科長 内田 浩氏
- 全 紡織科長 山田 清和氏
- 桐生高工 紡織科長 飯野 知次氏
- 全 紡織科長 飯野 知次氏
- 全 色染科長 豊田 今吉氏
- 全 色染科長 森 平三郎氏
- 全 色染科長 山田 廣氏

- 全 紡織科 相田新次郎氏
- 全 色染化學科 吉田善一郎氏
- 全 色染化學科 岩本 健二氏
- 全 色染化學科 松島 久一氏
- 全 色染化學科 天野 清一氏
- 全 紡織科 神山房次郎氏
- 全 紡織科 高橋 富雄氏
- 全 紡織科 根岸榮三郎氏
- 全 色染化學科 森本 好昭氏
- 全 色染化學科 大山 中治氏
- 全 色染化學科 加賀山猪三郎氏

及桐生高工教官等五十餘氏參集我々の爲めに懇親會を開催して下された。本校卒業生では星田馨君(紡十二)が出席した。十三日の日程は桐生市内の工場見学である。午前十時迎への自動車にて出發先づ飯塚織物工場へ行く。次に桐生機械株式會社へ行く。前島專務の御説明にて新式の仕事機械の多いに驚く。商工省輸出絹織物検査所を見學し最近新裝なれる桐生織物同業組合事務所にて晝食を馳走に於て。午後の見學豫定は日本絹織會社、兩毛製織會社、染布工業會社であるが何れも會て見學した事があり風邪で具合が悪くして丁度米澤、京都の方々が歸られるので一所に歸る事と途中上水道水源地に登り桐生市街を見降し停車場に至り一時三十分桐生發にて上田へ歸つた。

酒一斤賣買的!

梅トル法改正案論議の頃に、「一寸、二リツトル許り燗けるよ!」と感ぜが田ねえぢやないか」と斯んな呑み話を聞いたことがある。これは或る年のヤツパ會のこと、記憶する。

石坂先生! お覚えがありませんか? 處で、酒一斤買せて、それで酔ふか、酔はぬか! 呑めるか呑めぬか直ぐに悟れるやうだつたら、一寸頭が良いと褒めて良い。この満洲の酒、油類の賣買が目方で行はれる事を知つたのが漸く昨年の暮、波瀾以來、八年目なんだから笑はせると云ふもの、それが野暮だと云ふなら………「マー待つて呉れ、黙つて二合半、買ふことにする。同じ事、同じ頃、斧を買はせた處が一斤と何の位あるから三十五錢と云ふ話、この斧を目方で賣買することに對しては經濟學上、何んとか一理屈あるべきだらうけれど、筆者はそんな面倒は嫌だから世間並に處變れば品變る位にして置く。たゞそれだけで一寸濟まな

いは永年酒さへ一斤二斤で賣る外國に來て——「チョッ!」氣障なセンチだなんて云ひつゝ無し——年々歳々母國の事情に疎くなること、云へば少し叱られても文句は無いのだけれど、實は小生の考へるのには蠶の都、學問の中心を遠く離れて追々にその道の常識から置去られることである。それが内地に居るなら、母校の近くに居るなら、いまま少し先生方にも御指導願へるだらうし、先輩諸兄にも啓發されるだらうし、いまま少しは技術者らしい、いまま少し學問的な仕事が出来たらうと云ふ果無い憧れ! (オイ! 矢張りセシナかな!) 千曲時報は、筆者の考へる千曲時報は斯ふした惱みを解決して呉れる役目、蠶絲業に對する新しい常識的智識を盛つて遠隔の地に働く會員を勵まし慰める編輯方針をとつて呉れても良いと思ふが如何。

會つて自分は前の編輯者に例へば「機業地巡り」の如きは絶好の題材だつたと申し送つて編輯上の参考に供せられたき旨を述べたことがある。機業地巡りの筆者香山先生に御一考を願ふと同時に寄稿者各位にも御一考を願ひする。希望をもつと具體的にしよう。例へば二月號の千曲時報の蠶學談話會の記事と、商店の廣告以外に、誌面の何處に蠶の臭ひ、絲の香を臭ぐことが出来るか。筆者は上田蠶絲の同窓會の機關紙らしい誌面が欲しい。筆者のこの意見が頗臭いと云つて批評される人があるならば、蠶絲界報一月號所載の田中博士のあの單に氣の利いたとだけでは到底言ひ盡せない隨筆を玩味されよと答へよう。見本は其處にある。未見の大先輩乍ら畏敬惜く能はざる千枚子、時報編輯に對しては定めし卓見を所持されるであらう。千枚子あたりに漫語に托しては御意見承り得れば幸甚である。勿論、小生とても要求を出す以上は折に觸れ見本は出す心意。

それからそれへの記

一、七久里と言ふ事

竹内 善吾

一月三日上田近在及歸郷同窓會が別所花屋ホテルで新年宴會を催した事に關しては『七久里會の記』として先月號に於て詳細報告された筈である。誠摯勃たる元氣、潑瀾たる英氣は期せずして大氣焔焔然と成り或は割れる様な爆発となり然し和氣霽々たる勞働氣の中に終始した事は主催者一同全く豫期以上の成果を収め得たものと衷心感謝した事である。贊同者會者の意見もあり毎年こうした氣の置けない古人の所謂『物言はざれば腹ふくる』の思ひ無からしむる會を開催し度いものである。扱こうした有意義の會

も最初の事ではあり取急いだ爲『何々會』と名をつけるのが後廻しの格恰になつて仕舞つた。そこで前號記事にも見えた通り齋藤場長から『七久里會』としてはとある。一體『七久里の里』とは別所の異名である。そんな事からしても『七久里會』と言ふ名は誠に以つて適切妥當の名と思ふ次第である。主催者はそのまゝ取つて命名したものである。そこでこの『七久里』の由つて来る所以に關して牽強附會に類する二、三を見たり、聞いたり、根拠も無く考へたりしたまゝを書いて見る。

蠶絲學雜誌記念號

報文集

既に一部の會員諸氏には御依頼申上げて居りますが、本年開かるべき母校開校廿五周年を記念祝賀せん爲『蠶絲學雜誌記念號』を發刊致します。就きましては一々皆様に御依頼状は差上げませんが別記御承認の上蠶絲業に關し調査研究に成りました論文を報文として御寄稿下され名實共に充實せる記念論文集として發行し得る様御援助あらん事を御願ひ致します。

- 1、原稿締切 昭和十年七月末日
2、報文の種類 主として蠶絲業に關する研究調査
3、寄稿宛名 千曲會蠶絲學雜誌編輯係
4、添書 廿五周年記念號應募原稿
原稿用紙は御申込次第御送り申します
蠶絲學雜誌編輯係
既に御依頼しました各位に對し締切を八月末と申上げてありますのは七月末日迄に變更致しました(山口記)

情勢を積極的に動かす程でなく寧ろ動かされた形である事は誰にも自信を以つて否めまい。マア主觀的な言分には色々あらうけれど、どつちかと言つたら世間に引きづられた部分の方が多からう。先づ釋迦や孔子やソクラテス等と言つた人達が始めて社會をリードした部分の方が多いだらう。換言すれば衆生を引張つて悟りとか愛とか仁とか言ふ様な今迄知らなかつた世界を覗かせたり、物の見方や考へ方を教へたりして兎も角社會の情勢を作つた形だらう。少々横道に這入り過ぎたが我々衆愚は全く社會の動き、大勢の動向によつて思想が絶えず動いてゐる事は事實だ。一昨々年頃まで隆盛を極めた社會主義思想時代に誰の頭にも幾分金持と貧民のある不合理が腹だしく思はれもしたらう。こんな譯で今俺達は所謂佛敎復興時代の中に生活してゐる關係上結局佛敎的立場から我が七久里會の『七久里』を見ようとする極めて凡人の見方をしようと言ふ理由。

報文集

小豚那史は言ふ。傳説に別所温泉を總じて七久里の湯と呼ぶ。入雲御抄に七久里湯は信濃の御湯と同じと言へるものとす。而してその稱呼の基因としては日本武尊東征の歸途こゝに七所の温泉を開き入浴し給ひて七苦離の湯と名づけらると言ひ或は淳和天皇朝、天長二年春頃鳴動はけし山麓火坑を生じ煙霧を噴く。後坑中より紫雲立上り觀世音菩薩を出現す。こゝに至りて火坑煙霧を留め四近に温泉を湧出せり。皆菩薩救世の賜なり(餘篇五六頁)即ち日本武尊の説と觀音様の功德の靈驗記とである。この説に關して上田地方の歴史家F氏に正したる所、或は附會の説ではないかとの返答、この傳説の那史の典故に就ては知る由も無いが私は現代向に觀音様と『七久里』をコンビした方が

面白くないかと考へたのである。觀音は元來法華經八卷中、第二十五品の所謂觀音經即ち妙法蓮華經普門品第二十五に由來するものである。觀音は詳しくは觀世音、世音(衆生の四苦や、八苦八万四千の煩悩)を觀じて濟度せしむるの意である。由來佛敎の見方によつては心理學である。又諦めの學問であると言へよう。安心立命論であり衆生濟度學であり左翼的見方では争闘心の癡癡劑、即ち阿片であるさうだ。だが然し俺は宗教は『物の見方を教へる』ものだと言つて差支へ無からうと思つてゐる。悟つたからつて煩悩が全く無くなるものでは無い。(斷つて置くが俺はまだ悟つた譯では無いデスゾ!) 諦めたからと言つても決して慾望が全然無くなるものではない。大聖釋迦が出ても基督がバイブルを發行しても世の中から罪惡や戰爭や生存競争が無くなりはない。唯こうした目を蔽ふ様な悲慘事や惡事に對する考へ方、それから善惡禍福が整然と(佛敎的に言へば誠に因果關係に於て整然たるものである。一因果關係で無く因縁關係である)起るこの娑婆世間の見方を訓へる丈だ。煩悩があり慾望があり罪惡があり罪惡があればこゝろの見方によつてはそれこそまゝ、悟りの相である。澁柿の澁がそのまゝ、甘味哉である。煩悩が無くなつて、即ち、煩悩を斷つ事によつて悟れる事が出来ると言ふのは小乘の教である。煩悩があればこそ、罪惡心があればこそ悟りがある。悟りと煩悩は二而不二であると言ふ説明が大乗の教へる所である。マア少々横道に過ぎたが觀音經の精神の表れとしての觀音様が、即ち佛敎觀音であるが、この觀音經の中、長行に屬する内に七難の解脫がある。水難、火難、風難、賊難、劍難、囚難、惡鬼難がこれである。この七難は一心に觀音を念ずれば直ちに解脫せ

らるゝと言ふのである。之は一心稱觀世音菩薩名號是菩薩能以無畏施衆生名者於此惡賊當得解脫と書いてある。何處にも良くあるのが神佛の靈驗記である。補正成は多聞天(四天皇の中、觀音經にも出る)の加護によつたとやら、太閤秀吉は日吉神社の何とやら、それから神佛の名にかくれて惡事を働く惡者退治の岩見重太郎武勇傳も生れると言ふもの、或は金比羅利生記とか扱は何と全く數限り無く傳はつてゐるが、壺坂靈驗記(其他二、三あると思つたが)等は觀音様の靈驗あらたかなるを述べたものである。こんな事から考へ合して七久里、七苦離、七難、觀音、別所院内、と根拠も無いが考へて來ると七久里の湯、七久里の里と觀音様を結びつけるのは全く無鐵砲の暴計では無さうであると先づ以つて自譴自讚の形である。即ち觀音様の靈德を稱へる意味で別所を七久里、七苦離の里としたものではなからうか。別所に來る程の者は觀音様の御利益にて七難を離す事が出来ると言ふ程の意味は無かつたらうか甚だ牽強附會の説と言ふか、自分勝手な想像ではあるが斯う思ふ者である。斯くの如き場所に於て七久里會の名の下に一年間の世間苦、七難もあらう、三毒もあらう、四苦八苦、八万四千の煩悩娑婆苦から一日の清遊によつて解脫し様と言ふ蟲のよい話だ。だが然し結果に於て言ひ度い事を言ひ、好きな事を論じ不平不満を打つ放し全くの極樂を現出したのは觀音様の御利益か、七久里湯の然らしむる所か、一同齡數十年も延びた氣がしたのである。又來る年に於て最も有意義にこの七久里會を開催し大方會員の贊同を得たいものである。(一九三五、一一二)

早春章

横濱 正木章三

石激る垂水の上のさざめ
萌え出づる春になりけるか

(萬葉卷八)

百餘日の長い冬籠りの病床生活にも春
は訪れて来た。一日と快癒し昨日今日
暖かな陽光を浴びて軽い散歩も出来るや
うになつて、今日送いろ／＼面倒を見て
呉れたり、何れとなく御世話して下さ
つた同窓の諸兄に心よりの感謝をして居
る。今後共にこの感謝の念を豊かに育
て、順應生活をして行きたいと思つて居
る。この間に、外部的に大きく損失した
ものを、内面的に少し宛なりとも補ふ心
から、静かに讀書生活を續けて来て居る。
主として我國のクラシックを讀み直し
て居る。古事記、萬葉集、平家物語等。
又、岩波の芥川龍之介全集も佳い心の糧
である。

時報第五七號(九年十二月)誌上の母校
ニユースで、甘茶會美術展の記事を讀ん
で、井上先生初め、石倉、早川、金子諸
先生方の、日本畫、水彩畫等を出品され
て居るのに非常な親しみを感ぜ、豊かな
心持になれた。明け暮れ研究室、實驗室
に籠り暮らして居られる井上博士等の一
見意外にさへ感じられる一反面を見る事
が出来た。然し長く考へれば、之は決して
意外な事でも無く、むしろ一つの人格
の中には常にコントラストな二つのもの
があるのでは無いかと思はれる。

初期の社會主義者として知られた大杉
榮が、フアールを譯した昆蟲學者であ
つた事、輝ける無産派の闘士だつた山本
宣治は、眞摯な生物學者であつた事、明
治文壇の雄傑岡外は軍醫であつた事、或
は青山腦病院の院長は、人麿研究者とし
て知られた歌人齋藤茂吉である事等と思
ひ合はせる時、充分に頷ける所のもので
あらう。

思ふに常に一つの垣の内に籠らねばな
らない職にあるものは、休日を出来る支
け利用して垣の外に出て、フランクな、
オープン、ハーテツトな姿になつて見る
事が必要なのでは無いだらうか。人間の
心の底には、太古の遊牧民より傳はる浪
漫性が多少なりとも流れて居ると思はれ
る。我國最古の純文學萬葉集の作者達は
當時の官人、武人が大多数である事も考
へねばならぬ。

時報一月誌誌上で、在學中の東京生活
二年間に學校の事、個人的な事等で色々
と世話して下さつた小林貫一兄の逝去を
報ぜられたのは悲しい。冬でも足袋を用
ひず、ゴツ／＼の小倉の洋服一着で私服
など着た事もなく、坊主頭で孜々として
學んで居た兄。寮の爺さん婆さんの息子
さんが失敗して金融等頼みに来た時、親
味に年寄達の相談相手になつて居た兄。
或る時はその息子さんの家の蠶を見てや
りに出掛けて行つた兄。試験期も近づく
と色々問ひ合せに来る級友達に、君
は誰先生のノートを良く見よ。君は何先
生のをもう少しやれ。等と詳しく指導
して居た兄。又或る時はユーモラスな口
調で、佐久言葉で戯談を飛ばして皆を笑
はした兄。

断片的に想ひ起して見ても親しみのあ
る兄の面影が浮び出て、病後の涙を誘ふ。
僕を東京へ世話して呉れたのは、當時
養蠶部に助手をして居られた中島茂さん
であるが、東京には小林君が居る。あ
の君の下で勉強すれば大丈夫だ。と
云はれた程だつた。僕が寮の二號室(土
藏の内部を少く改造した建物)に初めて
寝た夜、小林兄は語つて呉れた。
君、専門にはね、五太郎と云つて太
郎の名のつく先生が五人も居るのだよ。
先づ校長の針塚長太郎氏、語學の和田仙

土産の蒐集

篤 之

太郎氏、製絲科の大瀧照太郎氏、それに
養蠶科の遠藤保太郎、佐藤春太郎の兩氏
——と、一人々々の寸評を加へ乍ら面白
く聞かして呉れたものだつた。その兄と
共に僕は上田生活を樂し東京で過した
のであつた。

二十五周年祝賀式のプログラムが發表
せられた。ゆつくり構えては居られない
やうな気分をそゝらせられる。在田會員
諸君の間では外にいろ／＼の催し物を景
物として考へられて居ること、思ふが毎
年代議員會當日を中心として開催せられ
る甘茶會なども本年は特に範圍を擴めて
全會員中から出品を求めたならば更に錦
上添花を添へ得るものではあるまいかと思
ふ。或は亦全國の名勝寫眞とか名勝地ス
タンブ等の蒐集陳列も時にとつての愛嬌
ではあるまいか。私は千曲會員が全國津
々浦々に分布して居る状況から見てもこの多
數の力の堆積を目のあたり見もし見せも
したい様な氣持に充たされて居るのであ
る。そこで考へて見たのだが餘り金がな
くつても困るし、持ち運びに困難なもの
でも困る。そうかと云つて後始末に困る
ものでは尙更いけぬ。この諸條件を避
けて併かも興味のある蒐集品を見たいも
のである。元來私は酒も飲めんことは無
いが菓子も好きである。そして會つて在
官中各地方に旅行し、地方毎にそのロー
カル味を帯びた名物菓子や菓へて歸へる
事を忘れなかつた。甚だ乏しい経験では
あるが相當多數の地方の物をこの舌の上
に載せて味はつたのである。この菓子を
各千曲會支會から三四點宛出品されたら
我が國全國を網羅した名菓を一堂に蒐め
得る事になる。その何れもが折箱若くは
或容器に納められて居るから陳列に困難

雪の菅平へ!

菅平

も感ぜずしかもその色とり／＼の光彩は
見る人の眼を喜ばせ、下戸の咽喉を潤は
しむるに足るであろう。そしてその後始
末としては除幕式當日の餘興抽籤等にあ
れば簡単に且つ有意義なる處分があ
り、集團の威力でなければ出来ない事
である。これを千曲會でやつて見たらど
うか。來會者の御慰みになる事は必條で
あり、或は又好事者をして垂涎措く能は
ざらしむるものとなるであろう。長崎の
カステラ、京都の夜の梅、秋田の露濱、
大垣の柿羊羹、鹿兒島の分坦濱、おゝこ
う並べただけでも垂涎が出る。ぜひ諸君
の御贊同を望む。

菅平スキー場は長野縣上田市外長村にある。海拔一、三〇〇米内外の標高を維
持したる高原、上信國境にそゞり立つ猫岳(二、一九五米)と四阿山(二、一三三
米九)の頂上から緩く曳いた大傾斜面、その雄大なスロープは雪の王者シユ
ナイダー氏が、スキースのシニワルツ・ワルドに彷彿たりと激賞した所である。
交通は信越線田原下車、上田から眞田まで電車、眞田から菅平口まで
はバス、其處からスキー場まで六軒、スキーを穿けば一時間で行けるが、馬
籠に乗れば、老若男女如何なる人々でも、徒歩の辛さを嘲つことなく、完全
に乗物を利用して樂々とスキー場まで行かれる。

雪質は、粉雪の日が多く、積雪は一米内外が普通であるが、全部芝生の高原
であるから、極く僅少な雪量でも完全に滑走出来るのが菅平スキー場の他の
スキー場に比較して斷然優越せる一大特色である。

宿泊設備としては、菅平ホテル、高原ホテル、鐵道省「山の家」其他に旅館、
農家等があり、全部の収容力は約二千人である。宿泊料は一泊三食で菅平ホ
テル一圓八十錢「山の家」一圓十錢其他の旅館、農家等は一圓十錢乃至一圓八
十錢である。各旅館、農家には、貸スキーの準備があり、一日一臺の料金二
十錢。

汽車賃は、東京、名古屋、大阪各鐵道局管内主要各駅から菅平口まで(汽車、
電車、自動車を含む)割引がある。菅平口から各宿泊所までの馬籠賃は上り
三十錢、下り二十五錢である。但しこの間の下り六軒は、スキーで滑降すれ
ば愉快である。

海拔二、一九五米の猫岳登山は、誰でも試むべきものである。上り三時間下
り一時間半、頂上には物凄い樹木の怪物がある。下り六軒の滑降は、爽快無
比スキーの眞の味は此處で初めて味はれる。

誰でも大なる勞苦の後は、大なる休憩を欲するが如く、雪深い菅平スキー
場で、充分にスキーの滑走を樂しんだならば、その歸りには當社滑線の別所
温泉で、温い湯に包まれて、ゆつくり休憩するのが、心身の保養上最も
よいことだと思ふ。別所温泉は上田驛より電車で三十分、最も適當な位置に
ある。旅館は十二軒、何れも内湯の設備があるが、別に共同浴場が四ヶ所あ
る。就中石湯は天然岩石の浴槽で、温泉は岩間より湧出し、古くより名湯と
して知られてゐる。

當社では温泉行(スキーヤーの爲め左の様なクーポン券を發行してゐる。

- ◇日歸券 (上田一別所温泉間往復電車賃一食料)
 - 青色 一圓十錢 白色 一圓四十錢
 - ◇宿泊券 (上田一別所温泉間往復電車賃宿泊料)
 - 青色 一圓九十錢 白色 二圓四十錢
- 右のクーポン券は、菅平ホテル前の旅行案内所及當社各驛に於て發賣をして
(上田温泉電軌株式會社)

(二月二十二日稿)

上田便り

道祖神祭 上田市の傳統の一つ。車の付いた藁製の馬に餅を背負はせて子供が曳いて行く道祖神のお祭りは二月九、十、十一日に亘つて催された。

上田の建國祭 皇紀二五九五紀元の佳節を迎へた上田市では招魂社前に建國祭を舉行市長、各官衙、學校長、團體長、蠶專、上中、蠶業、高女、實女、青訓、少年團、裁女、小學校生徒、分會員、消防組員其他一般市民三千餘名が参列建國の大精神に結盟すべく厳肅裡に建國祭並に除隊兵歸還奉告祭を舉行した。式後市公會堂に於て正午より市並に聯合分會、聯青、愛婦上田分會、女青主催の下に市長以下各種團體長一般市民参列の下に除隊兵六十三名の歡迎會を盛大に舉行した。

菅平スキー場の來場者 菅平スキー場へ押寄せたスキーヤーは二月十五日現在で一万九百五十九人で昨年同期に比し約五百名の増加である。

外國人の來管數は八種國延人員三二七名内男二〇七、女一一五の多數に上つてゐる。

二月十日十一日は日曜と祭日が続いたのでスキーシーズン掉尾の盛況を見せ上田縣下車のスキーヤーは二二〇八人で之地元スキーヤー五百人を加へて約三千人に達した。

菅平の映畫化 コロンビヤレコードの主題歌『銀嶺に踊る』及び『ヒュッテの一夜』の映畫撮影ロケーションの新興キネマの一行は二月十五日菅平に到着數日滞在撮影した。監督は西鐵平、主なるスタッフは江川なほみ、沖本映子、ジョウオハ、花房銀子、田中春男、田中筆子、國城大輔等て撮影場面は菅平スキー場、グレンデ別所温泉、上田市街、上田驛プラットホーム等全八巻オールサウンド版である。又鐵道省觀光局でも海外へ宣傳映畫『白銀の魅惑』撮影の爲めに菅平に技術數

名出張二日間滞在した。新藤澤スキー大會 上信國境新藤澤スキー場では二月十七日午前九時より第一回アマチュアスキー大會を開催、出場選手は上田、小諸、菅平、草津等から六十餘名参加し壯觀であつた。

尚遊技種目は五千米リレー滑降、スラローム、蜜柑拾ひ、提灯競走其他各種であつた。

新任大村知事の初視察 新任大村長野縣知事は主務省に事務上の打合せの爲め上京の途次上田市を初視察する事となり二月二十日午前七時半縣廳出發自動車にて八時半東鹽田村國幣中社生島足島神社に参拜、午前十時上田市に入り官衙其他に新任の挨拶を述べ午後一時半より市公會堂に於ける座談會に臨み午後五時五十分上田驛發にて上京された。

文士スキー大會 久米正雄、佐々木茂宗氏等の録音組文士二十餘名は二月二十三日來田二十四日菅平でスキー大會を開催した。

横町新築町の下水工事開始 上田市では兼ねてより計畫の横町新築町の下水改修工事工費一万三千圓を着手する事となり二月廿三日地鎮祭舉行、廿七日より着工した。従業人員延約一万人で五月迄に完工の豫定。

鐘紡上田工場地均工事開始 上田市の鐘紡工場敷地均工事は設計變更等から着手を見るに至らず何時になるかと早くも市民の間に不安の氣分さへ起るに至つたが市當局の折衝奏効し工費七万八千圓を以て二月八日地鎮祭を行ひ十日から工事を開始する事となつた。尙附帶工事たる敷地内を通過せる廢尿水路位置變更工事は一月四日着手したが之の程完成し二月二十七日より通水した。

上田明照會表彰 上田市明照會(田町淨念寺内)は私設社會事業團體として紀元の佳節に當り宮内省並に内務省より表彰された。

母校ニユース

校内スキー大會 母校職員生徒三百名は二月九日を体育デーとし菅平でスキー講習會を催し出席者は職員三二名學生男一九一名女一五名計二三八名に達し全員を初等、中等及職員女子の各級に分ち講師は廣川助教授、六川忠一郎、茅野功、小林尚一、宮坂收、平尾孝平の諸氏、コンデション良好にて猛練習を行ひ大分上達したらしい。大半は其夜母校ヒュッテ及農家に分宿し翌十日は遊技大會を開催滑降レース、スラローム、ジャンプ等の種目に就て行ひ盛況裡に終り午後六時無事歸校した。

上中會送別會 二月十四日午後五時から香野野で蠶專上中會の送別會を開く、出席者は卒業生五名學生廿五名に達し盛會であつた。左は當日出席者の寄せ書を示す。

上田市青年會 上田市青年會は二月九日午後九時より第一回アマチュアスキー大會を開催、出場選手は上田、小諸、菅平、草津等から六十餘名参加し壯觀であつた。

尚遊技種目は五千米リレー滑降、スラローム、蜜柑拾ひ、提灯競走其他各種であつた。

新任大村知事の初視察 新任大村長野縣知事は主務省に事務上の打合せの爲め上京の途次上田市を初視察する事となり二月二十日午前七時半縣廳出發自動車にて八時半東鹽田村國幣中社生島足島神社に参拜、午前十時上田市に入り官衙其他に新任の挨拶を述べ午後一時半より市公會堂に於ける座談會に臨み午後五時五十分上田驛發にて上京された。

文士スキー大會 久米正雄、佐々木茂宗氏等の録音組文士二十餘名は二月二十三日來田二十四日菅平でスキー大會を開催した。

横町新築町の下水工事開始 上田市では兼ねてより計畫の横町新築町の下水改修工事工費一万三千圓を着手する事となり二月廿三日地鎮祭舉行、廿七日より着工した。従業人員延約一万人で五月迄に完工の豫定。

鐘紡上田工場地均工事開始 上田市の鐘紡工場敷地均工事は設計變更等から着手を見るに至らず何時になるかと早くも市民の間に不安の氣分さへ起るに至つたが市當局の折衝奏効し工費七万八千圓を以て二月八日地鎮祭を行ひ十日から工事を開始する事となつた。尙附帶工事たる敷地内を通過せる廢尿水路位置變更工事は一月四日着手したが之の程完成し二月二十七日より通水した。

上田明照會表彰 上田市明照會(田町淨念寺内)は私設社會事業團體として紀元の佳節に當り宮内省並に内務省より表彰された。

紀元節賀式 紀元節賀式は二月十一日午前九時半より新講堂に於て全校職員生徒参列の上行ひ終つて招魂社に於て行はれた建國祭に参列した。

織維工業學會創立總會及高等織維工業教官打合せ會 二月十一日紀元節の佳節を卜し東京丸之内有樂町蠶絲會館に行はれたる織維工業學會創立總會には母校より香山助教授出張、同十二日、十三日桐生高等工業學校に開催せられたる高専織維工業教官打合せには内田教授、香山助教授が参加した。

小澤綱吉氏逝去 長らく母校庶務課長として勤務せられし小澤綱吉氏は先年退職せられ故山神奈川縣足柄上郡中井村難色に餘世を送られてゐたが二月十八日逝去せられた旨通知があつた。誠に御愁傷に堪えぬ。

無試験檢定第一證合格者決定 無試験檢定志願者蠶蠶科十二名、製絲科二名、紡織科九名に付き二月十九日第一教室にて教授會を開き蠶蠶科十名紡織科二名の第一證合格を決定した。昨年は志願者が蠶蠶科七名、製絲科六名、合格者が蠶蠶科十二名、製絲科三名であつた。

廿五周年祝賀記念品係協議 記念品係は三月二日協議會を開き勸業職員備人に贈呈する記念品の種類、物故者の追悼會の方法、千曲會員徽章の構造及圖案、記念品(風呂敷)の地質及數量等に付き協議する處があつた。

學期末試験開始 三學年の三學期の授業は二月廿七日迄で二日間臨時休業三月二日より八日迄學期末試験である。

第一回蠶業講話會 二月號本紙に豫告した第一回蠶業講話會蠶業部會は二月廿四日午前十時より開催、出席者は同窓生外六十名の盛會であつた。午前は佐藤(春)先生の専門の遺傳學及細胞學の方面よりの生物機構に就ての講演があり益する處が多かつた。午後は同窓生須田、勝又、宮城、中澤、茅野、諸氏の種々興味ある研究發表があつた。午後三時よりは協議會であるが最初蒲生教授が座長となり養蠶と絲質との關係に就て討論し一時を費した。次ぎは齋藤上田蠶試支局長の座長にて種蠶育に於ける經濟育蠶法で議論百出し漸く結論に運んだ。次ぎは林

教授座長となり産繭處理法を討議し何時盡くると知らず深更七時に及び結論な達し得ずして散會したが會員一同得る所非常に多かつた。針塚校長先生も最後迄御熱心に會員の一員として蘊蓄を傾けられて論議された。次回は母校内で開催されるであらうが母校附近のみならず遠方の同窓諸君も御來會を希望してやまない。

談話會例會 二月度の談話會例會の時、題目、講師は左の通りである。二月八日(製絲紡織部) 太田 三郎 一、蠶兒に於けるマルヒギー氏管の分泌物に就て 枇杷木龍雄 二、昭和産業の工場制の養蠶經營に就て 濱村一彦 二月二十二日(化學物理部) 宮下 丈夫 一、硬化油に就て 二、混練絹絲漂白染色の理論的考察 小松忠一郎 三月一日(養蠶部) 平尾 孝平 一、免疫の話 町田 博 二、流行性感冒に就て 千曲會新入會員の歡迎會 三月八日午後二時より母校道場に於て千曲會新入會員の歡迎會を開催した。校内外の會員も多數出席し先づ蒲生理事長の開會の辭を兼ねて懇切なる處世の注意があり、次に倉澤理事より千曲會々則に對し説明があり、千曲時報に就ては香山氏より蠶絲學雜誌に就ては山口氏より會計事務に就ては窪田氏より何れも有益なる教訓を混へて報告並に勸誘ありて校内側の挨拶を終り次いで校外の箕輪貞三氏、小縣蠶業學校の飯島教授、上田蠶試の齋藤場長、上田蠶取の永田所長、長野蠶試の勝又技師の順序に有益なる御經驗と激勵の言葉を吐露され三科卒業生八十二名に深い感動を與へた。續いて新卒業生側から深井君、古平君、坂口君、猪原君、西澤君、田近君の感謝の言葉と將來の抱負乃至千曲會に對する質疑など青年らしい卒直さと熱意を以て述べ野口理事最後に閉會の辭を述べ打解けた有意義なる歡迎會を盛會裡に午後五時半終了した。

上中會

上田市青年會 上田市青年會は二月九日午後九時より第一回アマチュアスキー大會を開催、出場選手は上田、小諸、菅平、草津等から六十餘名参加し壯觀であつた。

校内スキー大會 母校職員生徒三百名は二月九日を体育デーとし菅平でスキー講習會を催し出席者は職員三二名學生男一九一名女一五名計二三八名に達し全員を初等、中等及職員女子の各級に分ち講師は廣川助教授、六川忠一郎、茅野功、小林尚一、宮坂收、平尾孝平の諸氏、コンデション良好にて猛練習を行ひ大分上達したらしい。大半は其夜母校ヒュッテ及農家に分宿し翌十日は遊技大會を開催滑降レース、スラローム、ジャンプ等の種目に就て行ひ盛況裡に終り午後六時無事歸校した。

上中會送別會 二月十四日午後五時から香野野で蠶專上中會の送別會を開く、出席者は卒業生五名學生廿五名に達し盛會であつた。左は當日出席者の寄せ書を示す。

紀元節賀式 紀元節賀式は二月十一日午前九時半より新講堂に於て全校職員生徒参列の上行ひ終つて招魂社に於て行はれた建國祭に参列した。

織維工業學會創立總會及高等織維工業教官打合せ會 二月十一日紀元節の佳節を卜し東京丸之内有樂町蠶絲會館に行はれたる織維工業學會創立總會には母校より香山助教授出張、同十二日、十三日桐生高等工業學校に開催せられたる高専織維工業教官打合せには内田教授、香山助教授が参加した。

校友會ニユース

送別辯論大會 辯論部は二月八日午後四時より新講堂に於て送別辯論大會を開催したが會次第は左の如くである。

- 一、開會之辭 委員 部長 井上 柳裕
一、挨拶 委員 部長 井上 柳裕
一、人生とは何んぞや 蠶一 望月藤夫
一、覺悟 蠶三 多田作造
一、社會相より見て 蠶三 滿澤 倫
一、花はあくまで紅に 蠶二 西澤政人
一、農村工業化 蠶三 藤田四郎
一、陶酔寸語 紡三 木山新一
一、良心の所在を問ふ 蠶三 米澤俊吾
一、滿洲漫談 蠶三 大山 融
一、閉會之辭 委員 部長 井上 柳裕

小鮎啓助君第一位となる 長野縣弓道昭和會主催第一回縣下通信競射大會は二月十一日各地に別れて行はれ本校學生小鮎啓助君(紡二)は二十射皆中と云ふ抜群の成績で個人優勝の第一位となつた。

- 柔道部編入發表 柔道部では二月十四日附を以つて左の通り編入を發表した。
江口嘉清(蠶三講) 丸川定雄(蠶二講)
原田正次(蠶一學) 北野三郎(紡三學)
木山新一(紡三學) 國島 正(蠶三學)
初段に編入す
岩切 作次(紡三) 鈴木 中(蠶二)
尾和 博行(紡一)

- 一級に編入す
吉越 繁夫(紡三) 土屋 安治(紡三)
山内 一(蠶二) 菱田 政二(蠶二)
神崎 神一(紡二) 清水 健一(紡二)
北澤 泉(紡一)
二級に編入す
坂本 勝三(蠶二) 田澤 輝雄(蠶二)
坂本 藤男(蠶一) 福島 虎(紡一)
岩崎 正典(紡一) 矢澤 登(紡一)
佐藤 佳良(紡一) 大塚 浩(紡一)
三級に編入す
上田 正三(紡二) 土屋 勉(紡二)
小柳 源一(蠶一) 中尾 芳明(蠶一)
桂 元三(蠶一) 兒玉 新一(蠶一)
叶澤 弘(紡一) 森 福一郎(紡一)

- 矢崎 勝(紡一) 柳澤 六平(紡一)
花岡 政康(紡一) 新保 義二(紡織)
四級に編入す
校友會役員決定 昭和十年度校友會役員は二月十五日次の如く決定した。

- 會長 針塚長太郎
副會長 井上 柳裕
總務部(部長) 佐藤 利一
(特別委員) 平尾 孝平 窪田 潤
小松忠一郎
(委員)母袋信介(蠶三) 岩田久太夫
(紡三)香掛祥平(紡三)宮下 弘(蠶二)
森福一郎(紡二)諸岡市郎(紡二)
文藝部(部長) 佐藤春太郎
(特別委員)茅野功 萩原清治 三宅玉留
(委員)出野正雄(蠶三)西澤正人(蠶三)
和田幸一(紡三)山木辰雄(紡三)菅尾源治(紡三)川久保元(紡三)内藤康三(蠶二)小泉辰雄(紡二)松本浩(紡二)
劍道部(部長) 和田仙太郎
(委員)渡邊善次(蠶三)上兼之有(紡三)
高木信雄(紡三)芳谷富雄(蠶二)富士巖(紡二)千吉良長二(紡二)
柔道部(部長) 岡 徳治郎
(委員)奥村忠治(蠶三)末次房一(紡三)
中川正(紡三)本居高行(蠶二)小松正敏(紡二)北澤茂樹(紡二)
庭球部(部長) 清水寛孝
(委員)關照(蠶三)鈴木武夫(紡三)天野彰(紡三)兒玉新一(蠶二)叶澤弘(紡二)
花岡政康(紡二)
弓道部(部長) 内田浩
(委員)横山良毅(蠶三)神崎開一(紡三)
小鮎啓助(紡三)馬場順一(蠶二)多川澄平(紡二)迫繁(紡二)
山岳部(部長) 山口定次郎
(特別委員)宮坂收 小林尙一
(委員)西川晋(蠶三)清水健一(紡三)藤松利八(紡三)武井仙太郎(蠶二)土屋二三男(紡二)岩崎正典(紡二)
辯論部(部長) 金子英雄
(委員)久保田不二夫(蠶三)星野智(紡二)

- 三)土屋勉(紡三)瀧澤昌一(蠶二)原口徹一郎(紡二)根岸市郎(紡二)
野球部(部長) 野口新太郎
(委員)横澤正雄(蠶三)東島藤次郎(紡三)門田勇(紡三)小本會眞佐雄(蠶二)青木静志(紡二)矢崎勝(紡二)
競技部(部長) 廣川正治
(委員)北原至(蠶三)渡邊綱男(紡三)上田正三(紡三)望月藤夫(蠶二)羽田滿(紡二)柳澤六平(紡二)
評議員
阿形 輝司 大瀧照太郎 石倉新十郎
遠藤保太郎 早川 直瀬 原田 親雄
谷 弘 蒲生 俊興 林 貞三
倉澤 美徳 依田 啓藏 和田 主計
蠶絲業經濟問題講演會 二月十六日午後一時より新講堂に於て辯論部主催蠶絲業經濟問題講演會を開催した。講師及演題は左の如くである。
一、米國財界事情附生絲貿易 横濱市原合名會社 河野通九郎氏
一、蠶絲業所感 長野縣生絲共同出荷組合 横濱出張所長 森田 三郎氏

校友會送別會 二月廿一日午後四時より母校道場に於て本年度卒業生の校友會送別會を開催した。學生は勿論校長、石倉、早川、岡、佐藤(春)、金子、清水、谷、目崎、須田、廣川、石井の諸先生も出席せられ先づ蠶二母袋君の開會の辭、校長、石倉、早川、金子の諸先生の訓示蠶三大山君の感謝の辭にて餘興に入り學生の唄、拍子、詩吟等、廣川先生の小守唄等があつて紡二天野君の閉會の辭にて六時半終了した。

- 劍道部昇段及編入發表 劍道部では二月廿四日附を以て左の如く昇段及編入を發表した。
深井 重一(紡三) 中村壽忠男(紡三)
三級に進む
清水 傳(蠶二) 渡邊 善次(蠶二)
千木良長二(紡一)

- 二級に進む
高木 晋(紡三) 武者 忠彦(紡三)
中島 健爾(蠶二選)富士 巖(紡三)
小松忠一郎(卒業生)
初段に進む
村橋 増雄(紡一選)

- 初段に編入す
大山 融(蠶三) 西澤 正一(蠶三)
青木 深(蠶三) 上木 忠士(紡三)
清水 英一(紡三) 今村 覺治(紡三)
河野辨太郎(紡三)
一級に進む
岡庭 武治(蠶二) 齋藤 修一(蠶一)
有間 正久(蠶一)
一級に編入す
川島 貞治(蠶二) 宮原 英俊(紡二)
鈴木 武夫(紡二) 渡邊 綱男(紡二)
香掛 祥平(紡二)
二級に進む
藤田 四郎(蠶三) 吉江 親正(蠶一)
兒玉 新一(蠶一) 原 利夫(蠶一)
佐藤 繁夫(蠶一) 小泉 辰雄(紡一)
土屋二三男(紡一) 久芳 大三(紡一)
小林 典夫(紡一) 下世古廣志(紡一)
二級に編入す
星野 智(紡二) 小菅 貞三(紡二)
小鮎 啓助(紡二) 門田 勇(紡二)
菅尾 源治(紡二) 上田 正三(紡二)
三級に進む
鈴木正一郎(蠶三) 小松 茂男(蠶三)
古平 義男(蠶三) 丸山 泉(紡三)
有賀 茂(紡三) 武井仙太郎(蠶一)
内藤 康三(蠶一) 宮下 弘(蠶一)
星野 秋次(蠶一) 瀧澤 昌一(蠶一)
二本 三雄(蠶一) 西原 美登(紡一)
土生 珀二(紡一) 川村 千登(紡一)
平澤和志男(紡一) 多川 澄平(紡一)
矢崎 勝(紡一) 迫 繁(紡一)
諸岡 市郎(紡一)
三級に編入す
本居 高行(蠶一) 加藤 沼二(蠶一)
四級に編入す

本會記事

二月七日 名古屋通信局へ千曲時報發行日(以前は一日とあり)の變更届を提出す。

二月八日 本會員のため多年盡力賜はりし岐阜片倉工場長山本仁作殿(山本傳市氏「蠶十六」の筆名)御逝去に付弔詞を呈す。
二月十五日 松本片倉蠶業試驗所勤務の馬場豊氏(紡十八)長逝に付遺族へ弔電を發す。
二月十八日 有志弔慰金故松田敬三氏遺族へ金三十圓、故鈴木貞治氏遺族へ金五十圓、夫々贈呈す。
三月一日 武田豊太郎氏(蠶八)長逝に付遺族へ弔電を發し山形支會會長へ會葬方依頼す。
三月二日 二十五周年記念祝賀「記念品係」の打合せを行ふ。

支會長 交迭
支會長(新任) 小岩井 桂三
同(退職) 高木 三治
副支會長(新任) 原 英三

叙任辭令(母校之部)
昭和十年二月八日 正五位勳六等 古谷 榮藏
叙勳五等授瑞寶章
昭和十年二月廿八日 副手 青山 武願(依り副手ヲ免ス)

叙任辭令(卒業生之部)
昭和十年一月廿五日 長野縣商工技手 依田寛之介
地方農林技師ニ任ス
高等官七等ヲ以テ待遇セラル
地方農林技師 依田寛之介
長野縣農林技師ニ補ス
昭和十年二月一日 地方農林技師 依田寛之介
十二級俸下賜

支會通信

躍進途上の滿洲千曲會

齊藤 猪之作

滿洲事變を契機とし滿洲國は既に建國三年を迎へ、王道樂土を謳歌すべく餘りに淺い時日ではあるが、赤い夕陽の滿洲曠野に母校の使命を胸に秘め、自己の天職に大活動大活躍をなすつゝ男子の本懐なりとの凱歌を奏するは滿洲千曲會の先輩諸氏と思はれる。

即ち二月五日舊正を利用し奉天は目貫通り、所は青葉町、滿洲隨一の稱ある『はり半』、時に赤い夕陽漸く大興安の嶺に落ちネオンの光田舎出の眼を誤魔化さんとし、滿洲人祝ひの爆竹轟く頃——正に六時（日本の七時）——その六時の鐘を期して第一回から第二〇回まで集るわ

トコ奉天に總勢十名集る其中には靈飼ふ人、石炭屋、麻袋つくりから外國官吏まで——はては孫の有る人も來たり千曲會とのよせ書き名文そのまゝ。

これだけ揃へば理窟抜き、食、住問題に圓滿解決と云ふ處が、斯くする間に夜は明けるとまでは行かなかつたらしいが記念寫眞で妻ある方もスマシ顔でレンズに注目。勿論嫁なき獨身は尙更ヤロが。

念には念を入れてと、自分でムイタ方が味一入なりと御手自ら御器用にムキ且イレル御方々處で御心配御無用と警報は『鼻の下なる口神様ヂヤモノ』

（註）『はり半』の御主人は九州は福岡で東洋趣味佛敎聖典の御研究殊の外深く、げにや吾等の部屋に裝飾はホンマにお寺サンの觀あれば斯くは伽藍になぞらへきと）

別れねばならぬ時間が來た。再會を約し乾杯——カンペイ——千曲會萬歳！と『はり半』後にせば奉天の街既に眠りに就き寒さは寒（零下十八度）流石滿洲の夜はシミヤスイ寒いにつけて思出すは國に残す父や母や彼女でも御座りませうが滿露國境線に吾等の生命を護る將士達、勇士達、今宵も亦（零下三十度）以下ならんと、名物馬車にゆられつゝ感謝の一瞬時、時に流星北方の夜空をかすめて一ツ、相當馬車のスピード低下せる頃着きましたるは、本間さんの御父さんの待つ御宅。御心盡しの御歡待、舞踊、あの舞この踊り彼の耳底に残る優しき音の連鎖。

み場所。（註）時に筆者相當のものなりしかば此邊の記録至極斷片的なり）御禮もソコ／＼に奉天驛に向つてエンゲンの響き三分間か。曠野をかける流線型超特急『アジア』ハト國際列車か、否々左に非ずして只の汽車は、夢の續きを見んものと三人を載せ、南へ南へと大陸を。ローマを指しては非ずして麗はしの都大連へ。斯くてぞ總會はいとも盛大に終幕を下せり。

筆者渡滿後日尙淺く、躍進途上の滿洲千曲會の末席を汚し、絶対に辭退罷りならぬの故を以て此稿を送る事を約す。駄辯多謝。

而して、熊岳城湯川氏、旅順長田氏には御多忙中にも不拘此好機を吾人に與へ下さいました事を、恩師石川先生には縣政の寸暇なき御身を吾等千曲會の爲に御出席下さいました事を、尙本間さんのお父さんの御厚情を千曲時報を通じて、吾等は滿腔の感謝を捧ぐる次第なり。因みに出席者は次の如し。

湯川秀夫氏 林 漢龍氏 金 學仁氏 石川博見氏 池田正五郎氏 橋本辰次郎氏 清水衛敏氏 本間國夫氏 本間茂鏡氏 舊大川猪之作



新興滿洲國千曲會の發展飛躍に備ふべく先づ針塚御大將の御出馬を絶対必要とす。

自分だけでは世界最北の蠶桑研究者だと云ふ氣で一生懸命努力して居ます。遼陽白塔も日本には見えざれど孤軍奮闘の最中、詳しき事は先輩に任しあり。

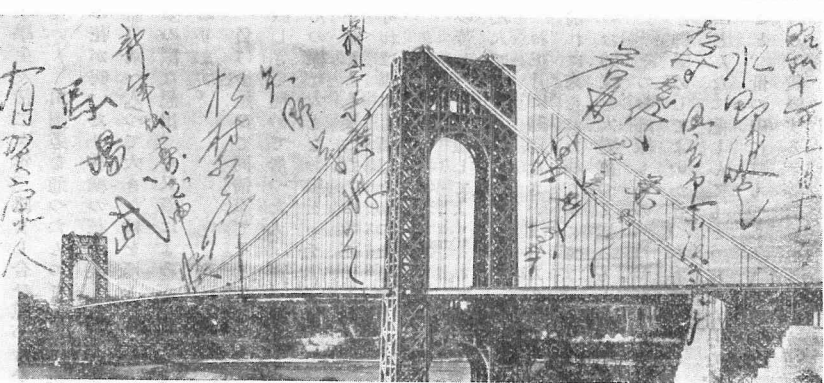
二十有餘年を経過したる今夜尙千曲川の清流を思ふ。

堅坑九百尺坑内で石炭を掘つて居る清水、新興滿洲國は昔と異ひます。針塚校長の御來滿を、即時に希望致して居ります。

松村愛信君送別會

松村愛信君今回内地に赴任せらるゝに就き紐育千曲會にては一月十七日紐育市末廣に於て新年會を兼ねて送別の宴を張る。

- 出席者は左の如し。遙かに異境より諸兄の健康を祈る。 一月十七日 紐育千曲會 松村愛信 水野健吉 有賀康人 若林清武 馬場



右の寄せ書の寫眞はニューヨークとニュージャージーを連絡するジョージ、ワシントン橋で工費六千万弗長さ三千五百呎世界第一の長橋である

訃報

御逝去通知

左記會員御逝去せらる。謹んで哀悼の意を表す。

馬場豊氏(絲十八)

昭和十年二月十三日御逝去

御遺族 小縣郡鹽尻村

嚴父 馬場 漸次

(故馬場豊氏近影)



武田豊太郎氏(蠶八)

昭和十年二月二十七御逝去

御遺族 山形縣東村山郡成生村大字今町甲三一

嚴父 武田 勇右衛門

山崎とも氏(蠶一)

昭和十年三月三日御逝去

御遺族 小縣郡神村大字上田

嚴父 山崎 宗三郎

弔慰金募集

本會々員故井上 泰利氏(絲十九) 故小林 貫一氏(蠶十五) 故中曾根誠一氏(絲廿一) 故馬場 政友氏(絲十) 故佐藤 彰二氏(蠶九) 故品川 末夫氏(紡九) 故仙場秀次郎氏(蠶一) 故馬場 豊氏(絲十八) 故武田豊太郎氏(蠶八) 左記諸氏に對する弔慰金を募集致します。馬場豊氏及武田氏は五月末日迄其他の諸氏は四月末日迄に取纏め御遺族へ贈呈したいと思ひます。夫れに間に合ふ振替口座東京第四三三三番へ夫々同氏弔慰金の旨御記入の下御拂込さい。 昭和十年三月十五日 上田蠶絲専門學校千曲會

故井熊虎太郎氏 御遺族よりの禮狀

謹啓 餘寒難凌候貴會益々御隆盛の段奉賀上候 陳者今般亡父に對し御丁寧なる弔慰金御惠送被下成御厚志の程寔に難有厚く御禮申上候、早速靈前へ供養致し候間御承知下され度先は不取敢以書中御禮申上度如斯御座候 拜具 昭和十年二月二十日 嗣子 井熊 幹郎

故松田敬三氏 御遺族よりの禮狀

拜復 春寒の候皆々様には愈々御健勝御多祥の御事と存じます。敬三生前中は格別なる御厚情を蒙り有難く御禮申し上げます。その御恩の万分の一をもつとくずして永眠致しました事は實に残念の至りに存じます。 且又此の度は一方ならぬ皆々様の御心配に預り多大なる御香奠を賜り重々の御厚志誠に有難く家内一同謹んでこゝに厚く御禮申し上げます。 畧儀乍ら書中を以つて失禮の段何卒御許し下さりませ。末筆ながら皆々様の御健勝を御祈り申し上げます。拜具 二月廿二日 松田 長子 松田 代治朗

故鈴木貞治氏 御遺族よりの禮狀

拜啓未だ寒氣も去らず候折柄皆々様益々御健勝の御事と存じ上げ候、亡父貞治生前中は一方ならぬ御配慮を蒙り洵に難有厚く御禮申上候、尙此度は重ね々皆々様の御芳情ただ々難有頂戴致し候、先は亂筆にて取急ぎ御禮まで申上度如斯御座候 かしこ 昭和十年二月廿七日 妻 鈴木 とも子 千曲會御中

とも様の御前に

山崎 百合 おほらかに晴れたるやよひの空一切のものが來るべき春に躍動して居る此日。(山崎とも氏遺影)



故小林貫一君思出編輯趣意書

廿八歳を一期として夭折された小林貫一君が立志傳中の一人であり稀に見る逸才である事の認識を持つ者は決して獨り我等上田蠶絲時代の級友だけでは無いと思ひます。 今君の死をして只單なる平凡死に終らしめると言ふ事は餘りに勿體なく餘りに無情な氣が致します。君の肉體は滅びても君の面影君の人格は、永く我等の内に生き我等を導いて居るとは言ふもの、亦一面時の流れと共に薄らぎ行く記憶、無限でない記憶である事に思ひを致しますればそこには何とも言へぬ遺瀨なき所謂寂滅感が湧然として起つて参ります。 在りし日の君の常住座敷数々の行爲を綴り學究的事蹟をもつて君の思出を記録として残し以て君を偲び君の英靈を慰めたいとの期せずして一致した我等の念願から同君の思出を編輯する事に定めました。 勿論思出は文字通り同君をして成るべく如實に我等の記憶に準據たらしめた

は。父君の語らるゝに依れば去月十六日頃より風邪にて倒れ、病室へ入られてより腸チブスと決定、お家へ電報にて知らせがあつたのが廿一日とか、急ぎ馳せつけられた父君に看とられつゝ其の後膈膜炎を併發して父君始め同窓方々の御手厚き御看護の甲斐もなく三月三日午前二時夜明の星の瞬きも未だうす寒き曉、悲しみの眼に守られつゝ消え去つた生命、魂は懐かしき故郷の空へとんだでありませう。 實社會に對する希望と複雑なる不安とを半々に抱いて學窓を後に日東製絲和田山工場へ入社してより二ヶ年足らず、第二回目の卒業記念日其の日も目前にありながら待たず逝かれしとも様。運命、その

いのですから従つて同君に關する記憶を成るべくそのまゝに記す事は元より一人でも多く一事でも深山に細大洩さず之を集めて整理し始めて其の目的を達し得るものと考へられます。 どうか皆様に於かれまして此の舉に御賛成下さいまして目的達成の爲に御力添への程を御願ひ致します。次に小林君思出に關し御投稿を願ふ要件に就いての希望を書き添へて置きます。 一、思出内容 イ、手紙又は葉書(中略すべき事項がありましてならばそれを削除して寫しを御願ひします。年月日) ロ、君と語つた内の印象ある事共 (同 前) ハ、其他の思出の事項 二、締切期日 昭和十年四月末日 三、原稿送附先 上田小縣蠶絲専門學校内小山恵治宛 昭和十年二月 發起人 十五會(上田蠶絲專養蠶科第十五回卒業生)

お正月に歸郷なさいましたのも思へば別れに來られた様なものです。一人きりのお姉様を大變慕つて居らるゝ様子でした。そのお姉様もあの時は御病氣、何んと御慰めしてよいか迷つた私でした。 『どんなに悲しんでもどうにもならないこと、世の中にはもつと不幸な人がある、我慢する』等言はれてすつかり元氣になつて歸場なすつたともちゃんでした。今にして思へばその頃の心配が間接に死を急がせたのではないでせうか。 幼くして母君に別れ短い生涯はほんとは茨の道であつた。茨の道もやがて越へれば今迄の苦しみも思出として笑つて語る園もあつたであらうに。 又道傍の桃の芽が赤くなり初めました。そこにも貴女は生きて居ます。澄みとほる空の中にもそれから赤き夕焼雲の中にも。 一切を超越したおほやかな笑顔も、やさしかりし母君と共に眠れ安らげ。 在りし日の面影を偲びつゝ拙き一文を友の御魂に捧ぐ。

虚南會の物故者を憶ふ

佐藤義助

三月になつて大分暖かな日が続く。しとくと降る春雨の音をきき乍ら——今日の仕事も終り新聞も読んでしまつた。雨の夜を訪ねて来る人もないらしい。炬燵にもぐり込んで種々の連想を辿る。想ひを馬場政友君に及んだ。何うして馬場君は他界されたらう。先日御遺族を訪ね墓参も済せた自分ではあるが仲々信じられない。

馬場君の想ひ出は数々ある。馬場君の生家は私の實家の直ぐ側で小學校へ出る前から文字通りに竹馬の友であつた。小學校から續いて中學へ進み、卒業後も君は製絲科へ私は養蠶科へ等しく蠶絲業を旨としたのであつた。卒業後も度々會つて昔話からその時代々々の話に蠶絲業問題を論じ合つた。或る時は土浦へも訪ねて来てくれた事もあつた。

三十年間の友人で故人の佐藤愛之君や佐藤彰二君が虚南會と言ふ會を組織して雑誌を出した事もある。時に旅行もする。或る時は庭球に野球に下手揃ひが押し強く對抗試合なども度々やつて若い所を充分に發揮したものだ。その時分迄は馬場君などは言はなかつた。正直な所君、僕は他所行きの言葉で大體が子供の呼名で『マーちゃん』と言つた。マーちゃんは頭も良い位だから、機智に富んで何んでも持つて来いこれが出来ない事はないと云ふ一寸變つた性格の持主であつた。

マーちゃんのお父さんが圓満な人でそれこそ敵のない人格者で私共子供の時に遊びに行つても面白い話をして下さつて今でも種々の事を覚えてゐるが、丁度お父様と同じ性質でまる移しと言つても良い。

マーちゃんは卒業後もずっと一關に居られ昔の氣質その儘眞面目に通されたから出世された事と思ふ。其後神戸に轉任されてから兎角健康が勝れぬと言ふ噂を

伺ひ、自宅に御静養中も私共は神掛けてその御恢復を祈つた。が今は空しく數々の想ひ出も過去の物語りとなつてしまつた。

再びあの聲に接する機会がない。あのユーモアに富む君は故人か。此の間も御母様に御面會して色々とお悔みを申し上げたら御歳を召された御母様が『貴方は肥えて元氣がよい。病氣をしたと一度も聞いた事がなくて何より幸ひだ』と申されたが御家庭の爲めにも随分苦心され

孝心の深い又御兄弟仲の圓満なりし君の御位牌に御焼香される御姿を伺つた時、私は限りなき哀悼の氣持で胸一杯になつた。その時は御遺族の皆様は上田の菩提寺に墓参のため御不在であつた。併し度々御面會の機会はある。御遺族の慰問も出来ると思ふ。又墓地は私の亡き母の眠る彌勒堂のすぐ上に靜眠されてゐる。春雨の音に、マーちゃん馬場君の冥福を祈つて止まない。

舊臘八日に佐藤愛之君が、越へて正月十四日に佐藤彰二君が、相次いで物故した。兩兄とは従兄従弟、それこそ同一コースを今日までやつて来て力と頼む二人の兄を失つた。私も一時は全く呆然、光明を奪はれた。

兩兄とも妻と二人の女兒がある。そしてその子供は二人乍ら今年から村の學校へ入學する。お父さまに手を繼がれて初の入學が出来得るならば定めし幸福であつたらう。併し今は空し！私には共同の大きな責任があるので今後は遺族と共に元氣よく非常時目指して突進する事が兩兄への最大の供養である。

兩兄の逝去に當つては蠶九の同級の方々を初め同窓の諸彦に色々とお慰問の意をこめて紙上を通じて衷心感謝の意を表し、尙今後共に何分の御交宜を希つて止まない。遺族も其御信仰の道に更生し元氣で愛兒の養育に専念中である。

今は亡き彰二、愛之、政友、三君と今上田の蠶種同業組合小縣支部の技師を勤める母袋良平君と私の五人で蠶事虚南會と稱して同村から元氣で通學した昨年暮から會員三名の物故者を出した。

母袋君も私もそれ迄は餘り口にもしなかつたが『二人きりになつちやつた。お互ひに何よりも先づ達者で暮そう』と泌々と語り合つた事だつた。

今度私の歸郷の時は母袋君と共に、墓參供養を行ひ亡き三君の冥福を祈り乍ら——俱にお互の『先づ健康』を祝そうと企畫を進めてゐる。(一〇、三、一)

馬場政友君の思出

新庄生



馬場君が病氣で寝てゐる而も再び立つ事が出来ないだらうと聞いたが、あの元氣な學生時代の馬場君を知つてゐる自分は直ぐに信ずることが出来なかつた。それから二三日経つた一月十三日折柄上京せられた林先生(義兄に當る)が『馬場の壽命は最早二三日だ』と云はれた。それでも尙万一を期待する氣持は春になつて暖かくなりさへすれば屹度恢復するに相違ないと念じてゐた。

馬場君は小縣郡鹽尻村の産、上田中學を経て大正十二年の製絲科卒業即製絲科第十回生である。自分等のクラスは先に井川清君を失ひ今又馬場君の長逝に遇ひ最早二人の同級生を失つた。

馬場君は卒業すると住吉君、山岸君、權君達と一緒に山十組に入つた。當時山十と云へば片倉、那と共に三大製絲と稱せられ年々數名の卒業生を迎へ旭日昇天の勢であり同社に就職することは同窓生の美望の的であつた。君は岡谷の本社で見習期間を過ぎ岩手縣一ノ關町にある同社の山の目工場に勤務することゝなつた。

生一本な君は乾蘭に、煮蘭に、工場の監督に、晝夜兼行、汗みどろとなつて働いた。そして工場の成績は著しく上り、君の手腕は漸く上司の認むる所となり、一方全従業員の信頼の的となつた。

『榮枯盛衰は人の世の常』などは誰が定めたる理ぞ。奮闘努力の功漸く酬ひられ愈々之からと云ふ時、惜しい哉山十製絲株式會社の没落に遇つた。物事に執着せぬ君であり霸氣に富んだ君ではあるが此時こそは斷腸の思がしたであらう。

あこがれの夢すた／＼に裂く異郷山十製絲の没落するや君の人格と手腕とに信頼する部下従業員は君を盟主として岩手縣門崎村に二百五十釜の横石製絲所を創立した。義侠心に富んだ君は捲土重來の意氣を以て工場經營の衝に當る事となつた。斯く人の和を得た新興の工場も不幸天の時を得ず蠶絲界未曾有の不況に禍され同工場は遂に閉鎖するの止むなきに到り君は涙をのんで故郷に歸り父母の膝下に暫く靜養することゝなつた。

働けど春はそつぽを向いて逃げ彼を生み彼を育みし信州の山河は傷付いた彼の心身を又元の如くに恢復せしめた。其後間もなく大日本生絲販賣組合聯合會神戸事務所勤務し更生の喜びを以て粉骨碎身業務に精勵し大いに上司の信

頼する所となつた。然るに不幸病魔に犯され暫く須磨の海邊に靜かに療養の日夜を送つてゐたが容易に恢復しきうにも見ないの途に職を辭し鹽尻村に歸り専心治療に務むることゝなり再起の日の一日も早からん事を願つた甲斐も無く花咲く春を待たで一月十三日苦難の一生を終えたのである。

年若き令閨、幼き嗣子を殘し、雄圖を抱きつゝも惠まるゝ日を待たで淋しく逝つた彼の心中の無念さは如何ばかりなりしぞ。

素晴らしい希望を持たば……宿病關心と逆五體が頑張らず馬場君は逸話に富んだ人である。在りし日の事どもを追憶して君が英靈を慰め君が冥福を祈りたい。馬場君はよく洋服の下にシャツを着ないで親譲りの肉襦袢で登校した。或日勘平さん(早野助教授)の體操の時間に平常の様に上衣を脱がされた。ところが馬場君は容易に上衣を取らうとしない。風邪でもひいたのか？否、脱れぬ道理……例のノーシャツ……馬場君の面目躍如たるものがあるではないか。

馬場君は頑張り屋であつた。確か二年の秋と思ふが柔道大會に優勝した。勿論彼の技は相當に勝れてゐたには相違ないが技よりも寧ろ元氣と頑張りで勝つたのだ。彼は立技、寝技何でも御座れに頑張り通して、がむしやりに闘つた。あの元氣な馬場君の面影が今でも眼の前に見える様な氣がする。どうしても死んだとは思はれない。學校を卒へてから唯の一度も御會ひする機会を惠まれなかつた。自分はその後の様子は人傳に聞いたに過ぎない。

唯學生時代の元氣一杯な君をのみ知る自分は此追憶の文を書きながら未だ何處かしらで御會ひ出来る様な氣がしてゐる。安らかに眠れ不安のない淨土。

弔慰金報告

- 故鈴木貞治氏弔慰金第五回 金壹圓也 松野正一 柏倉豊吉 右合計金四圓也 故松田敬三氏弔慰金第五回 金壹圓也 田口敏夫 伊藤柳作 右合計金四圓也 故井熊虎太郎氏弔慰金第四回 金貳圓也 松尾順策 右合計金貳圓也 故佐藤愛之氏弔慰金第二回 金貳圓也 萬石安太郎 右合計金貳圓也 柏倉 豊吉 原 清志 氏家 忠次 岸 善亮 鈴木 雄七 長谷川正雄 右合計金八圓也 故小林實一氏弔慰金第二回 金五圓也 遠藤保太郎 橋本 博 金壹圓也 工藤 見吉 氏家 忠次 志田 敬夫 遠山 正人 野澤司馬作 笠原 正巳 山崎 傳 大澤 實市 千村 敏三 萩原 清治 六川忠一郎 池内 眞吾 宮坂 收 黒岩次郎 安喰 定治 右合計金貳拾貳圓也 故馬場政友氏弔慰金第二回 金貳圓也 塚田卯平太 新庄哲二郎 牧野 春雄 金壹圓也 鷹野 誠一 佐藤 一 小山 久一 武本 本治 門田秀太郎 小池 貞章 瀧澤もとゑ 竹内 健二 金五拾錢也 茅野清三郎 右合計金拾四圓五拾錢也 故中會根誠一氏弔慰金第二回 金貳圓也 松野 輝彦 北澤 常雄 金五圓也 池田爲雄 三宅農富(榮) (田ノ岡實) 市原 文雄 太田 三郎 黒岩京次郎 小山 久一 武本 本治 門田秀太郎 小池 貞章

金五拾錢也

- 鷹野 誠二 田中 君子 栗山 とり 右合計金拾七圓五拾錢也 累計金貳拾參圓五拾錢也 故佐藤彰二氏弔慰金第二回 金貳圓也 萬石安太郎 金壹圓也 柏倉 豊吉 岸 善亮 後藤 仙彌 右合計金五圓也 故井上泰利氏弔慰金第一回 金壹圓也 宮下 幸三 宮下文四郎 黒岩京次郎 關 幸作 右合計金四圓也 故品川末夫氏弔慰金第一回 金壹圓也 橋本 博 金五拾錢也 鷹野 誠一 野口新太郎 右合計金貳圓也 故馬場豊氏弔慰金第一回 金五拾錢也 鷹野 誠一 茅野清三郎 右合計金壹圓也 故仙崎秀次郎氏弔慰金第一回 金壹圓也 森 干城 右合計金壹圓也

會費領收(三月五日)

- 昭和九年度通常會費納入者 (〇印は蠶絲學雜誌代共) 藤崎 鐵(蠶七) 日野 光平(蠶八) 岩瀬 義夫(蠶八) 前田 節男(蠶八) 〇中村 由枝(蠶十) 大澤 實市(蠶六) 〇瀨口 昇(蠶七) 〇西原 淳一(蠶七) 〇市川 龍哉(蠶六) 〇中澤 喜雄(蠶六) 〇若林 眞雄(蠶九) 都 彰夫(蠶九) 鷹野 賢造(蠶九) 〇林 四郎(蠶九) 〇高野 洛禎(蠶九) 近藤五代次(蠶六) 〇金 練治(蠶七) 内川 勇(蠶七) 〇西山 教吾(蠶八) 〇牧野 春雄(蠶十) 〇鈴木 信一(蠶十) 〇猿渡 兼光(蠶十) 〇合田 榮作(蠶十) 〇神津 輝人(蠶十) 〇永井 俊郎(蠶十) 〇菅野 喜通(蠶十) 〇張 復昇(蠶六) 〇菅野 英(蠶六) 山本金之助(蠶十) 〇高橋 尚一(蠶八) 今村與四郎(蠶五) 小林 一郎(蠶五) 野間 直之(蠶五) 佐藤 正(蠶五) 淺治(蠶五) 乾 正(蠶五) 千曲會規則第九條第一項第三號 による九年度通常會費納入者 〇矢澤茂登一(蠶一) 〇久保田正樹(蠶三) 〇吉川 誠彦(蠶三) 〇小林 庸(蠶三)

廿五周年記念事業

- 第十回贈出金申込者(三月五日現在) 十口(一名十口) 金額五拾圓也 松野 正一(蠶一) 六口(一名六口) 金額參拾圓也 稻石 佐一(蠶三) 五口(四名二十口) 金額百圓也 廣瀬清四郎(蠶二) 浦山 藤吉(蠶五) 太田 清藏(蠶一) 松尾 順策(蠶四) 三口(五名十五口) 金額七拾五圓也 大崎征内(蠶十四) 望月榮作(蠶十三) 齊藤幸藏(蠶十五) 久保田松藏(蠶十四) 越 英信(蠶十八) 二口(三名六口) 金額參拾圓也 金子幸一(蠶十三) 村上龜久司(蠶十七) 張 復昇(蠶十八) 一口(三名三口) 金額拾五圓也 森田三郎(追加)(蠶) 橋本辰次郎(紡七) 半田ひさ(準會員) 合計人員 十七名 合計口數 六十口 合計金額參百圓也 第十回贈出金納入者(三月五日現在) (〇印は完納を示す) 〇稻石 佐一(蠶三) 〇富 秀雄(蠶六) 〇岡部 彌平(蠶三) 〇木藤富士雄(蠶五)

千曲會々費の件

本會通常會費も昨年より今年にかけては二十五周年記念贈出金の一時金拂ひでは分納等々種々なるお金を納入していただくのでなか、大へんのこととお察し申上げますが、やはり本年も例年の如く五月下旬に集金郵便を以つてお願いいたしますから何分御納入の御準備の程今から御願ひ申上げます。 次ぎに 會則第九條第一項中第二號第三號の適用を受けらるる方に申上げます。 本年度は第五回の卒業生(養蠶科製絲科)の方々が該當する譯になりますから左記にも掲げますが何卒御熱心の程御願ひいたします。 尙既に適用を受けられて居る方の中にも規則がはつきりしない爲め御了解を得られなく帳簿の整理にも困惑し又御自身でも損をなすつて居る様な方もあると存じます故同様御熱心の程願ひ申上げます。

左記

一、此の際一時金貳拾圓也を納入され ば爾後會費の納入を要せざる事 (第九條第一項第二號) 二、右一時金貳拾圓也納入無き節は年々爾後八年度會費金四圓也納入せらるる事(第九條第一項第三號)但し蠶絲學雜誌代は別として 右二項は之迄の會費完納の者にのみ適用するのでありますから未納會費のある者は此際至急未納會費を納入の上前二項の何れかの適用を受けるわけでありませう。 若し未納會費及び一時金等一度に多額の納入に差支へる場合には出来るだけ早く未納會費の納入を願ふ方法として年々二回(五月及び十一月)凡そ五圓宛本會より請求する事にいたしませうから如何にその年度にお金を納入していただきますか未納會費の終るまではその年度に記帳は申上げませんからその點も充分御了承の程御願ひ申上げます。

故三谷徹氏記念(三月五日)

- 金五拾圓也 〇松野 正一(蠶一) 〇古東 幹太(蠶六) 金參拾圓也 〇小澄 晋(蠶二) 〇稻石 佐一(蠶三) 〇森田 三郎(蠶四) 金貳拾五圓也 〇酒井 末吉(蠶一) 〇岸 勝彌(蠶三) 〇太田 清藏(蠶一) 〇高木 三治(蠶三) 〇都筑 賢吉(蠶四) 〇松尾 順策(蠶四) 金貳拾圓也 〇小島 杉門(蠶八) 〇佐藤 一(紡二) 金拾五圓也 〇新穂 利信(蠶十) 〇三輪 貞徳(蠶十) 〇松岡 潔(蠶十) 〇森戸 晋(蠶十) 〇望月 英作(蠶十) 〇久保田松藏(蠶十四) 〇宮下 丈夫(紡四) 〇今村與四郎(紡五) 金拾圓也 磯野 良知(蠶二) 登坂 忠吉(蠶三) 〇小林 勳(蠶六) 〇金子 幸一(蠶七) 〇藤井 四郎(蠶六) 〇白川 孝昌(蠶九) 〇西田勇三郎(蠶六) 〇永井 俊郎(蠶七) 〇張復 昇(蠶六) 〇喜多尾猪門(蠶十) 〇宮下文四郎(紡十) 金五圓也 〇小林 國造(蠶二) 〇長瀬 深見(蠶五) 〇上林多兵衛(蠶七) 〇前澤 康雄(蠶十) 〇早乙女徳藏(蠶七) 〇吉田 太郎(蠶十) 〇堀 忠太郎(蠶九) 〇牧野 弘(蠶七) 〇齋藤 監(蠶十) 〇村上龜久司(蠶七) 〇齊藤 徳入(蠶七) 〇服部彌一郎(蠶十) 〇伴野 勳(蠶十) 〇清水 六郎(紡五) 〇三宅 清一(紡十) 〇市川みす(準會員) 〇半田ひさ(準會員) 〇小林敏子(準會員) 〇近藤たけ(準會員) 〇小林みよ子(準會員) 合計金額 七百拾圓也 累計金額 七千八百九拾六圓也

故三谷徹氏記念(三月五日)

- 資金寄附者芳名(三月五日) 金五圓也 太田 清藏 金參圓也 松野 正一 金壹圓也 岩瀬 義夫 右合計金九圓也 累計金壹千四百五拾五圓五拾錢也

會員動靜

(三月五日現在)

- 磯野 良知(蠶二) (勤)朝鮮黃海道海州、東洋製絲株式會社海州蠶種部(住)朝鮮海州邑廣石町二一五
武田 豊太郎(蠶一八) 昭和十年二月二十七日死亡
仲島 幸藏(蠶一五) 齋藤ト改姓
石附 文吾(蠶一五) (勤)福島市五十邊字塚間、片倉福島蠶種製造所
大澤 實市(蠶一六) (勤)長野縣上伊那郡伊那町、長野縣蠶業取締所伊那支所
西原 淳一(蠶一七) (勤)長野市、長野縣蠶業取締所
水野 敏夫(蠶一八) (勤)松本市蠶玉町、片倉製絲紡績株式會社普及團
濱井 成一(蠶二〇) (住)上田市常入町
松村 愛信(蠶二一) (勤)横濱市中區本町四ノ四三、日本生絲株式會社
河合 英一(蠶二二) (勤)大阪市北區中之島二丁目、江南株式會社人網課
近藤 五代次(蠶二六) (住)豊橋市坂口町三海津一七七
三ヶ田 良吉(蠶二七) (勤)熊本市内坪井町、肥後製絲株式會社
三好 彌市(蠶二八) (勤)新潟縣北魚沼郡小出町、新潟縣蠶業取締所
村山 晋(蠶二九) (住)神戸市灘區赤坂通り三丁目三〇三
依田 寛之介(蠶三〇) (勤)長野市、長野縣蠶業取締所篠井支所(目下建築中)勤務
久保田 松藏(蠶三四) (勤)岐阜市近ノ島、美濃乾繭組合(岐阜市へ合併ノ爲メ地名變更)
西田 勇三郎(蠶一六) (勤)鳥取縣倉吉町、那是製絲倉吉工場
馬場 豊(蠶一八) 昭和十年二月十三日死亡
東家 明秀(蠶一九) (勤)熊本縣下益城郡杉上村、株式會社松岡工場(住)杉上村
小澤 正一(蠶一九) (勤)長野縣諏訪郡平野村、岡谷生絲検査所(住)勤務先ト同
小林 進(蠶二〇) (勤)山形縣長井町、那是長井工場
山本金之助(蠶二〇) (勤)和歌山縣日高郡湯川村小松原、片倉紀南製絲所
松浦 彰義(蠶二二) (勤)本校蠶絲化學教室
石田 次男(蠶二九) (勤)大阪市西區江ノ子島上ノ町、商工省大阪輸出絹織物検査所
吉田 義夫(蠶一三) 查所
榎本 健治(蠶一三) (勤)福山市、福島紡績株式會社福山第二工場(住)福山市紅葉町甲一八五番地住宅内
市川 たつ(蠶一四) (勤)三重縣津市下部田町、錦華毛織株式會社
橋本 あい(蠶一四) (勤)三重縣龜山町、龜山製絲株式會社
山崎 とも(蠶一四) (住)長野縣小縣郡那村大字本海野八八五
三谷 秀子(蠶二二) 昭和十年三月三日死亡
(勤)朝鮮京畿道水原、朝鮮總督府農事試験場蠶絲部繭試驗所

新刊紹介

蠶絲業經濟研究會叢書第四輯 確水茂氏(本會々員)著 産繭の自主的處理 明文堂發行(一〇〇頁)定價六十錢

本書は蠶絲業經濟研究會の同人が相互の検討を終つたものに付き順次之を刊行願布せる第四輯である。自序に曰く、

地方的に産繭の處理難はあつたであらう。殊に山間地方に於ては自家産繭の處理に困難を來し、仲介商人を利用することとなつた事例は少くない。この産繭の處理難打開の目的を以て組合製絲の設立となつた如き例は各所に認める。然しながら過去の産繭處理難は、地方的、局部的であるを特徴とし、今日見られる如き全般的産繭處理難とは遙かに趣を異にする。

問題になつた、現に又問題となりつゝある共同乾繭組合、委託製絲、産業組合による産繭處理の三つを取扱つた。何れも今日幾多の問題を持つものであり、將來と雖もこれらの問題は相當紛糾するであらうことが想像せられる。この意味に於て本書の持つ使命が明かであると思ふ。尚こゝでは組合製絲を取扱ふのが當然であるが、組合製絲に對しては別に一書をものしようと思ふからその際に譲る。目次は次の如くである。

- 第一、産繭の自主的處理
第二、共同乾繭組合
一、乾繭組合の一般的展望
二、共同乾繭組合の展開
三、乾繭組合の不振とその動因
四、對策
第三、委託製絲
一、委託製絲の現状
二、委託製絲是非論
三、玉利氏の描く委託製絲
(附)生産費を繞る製絲業者、養蠶業者の對立
(附)委託製絲に關する文獻
第四、産業組合の産繭處理
一、總說
二、産業組合による産繭處理の時代的意義
三、産業組合中央會を中心とする産繭處理
(附)蠶絲業對策
四、長野縣産業組合に依る産繭處理
(産業組合の産繭處理に關する文獻)
以上にて本書の内容及價値が察知せられよう。敢て諸彦に一讀を奨む。

編輯室より

◇今月も石倉先生から有益な御玉稿を戴き巻頭を飾る事が出来た。本紙を通じて御禮を申上げる。

あり。又千枚氏が先日來校の折「上田の古實を載せてはどうか。例へば國分寺の蘇民將來の由来や補助館の製造等を調べて書く事はどうか」と云ふ様な御意見があつた。本紙の使命は會員相互の聯絡にあつて蠶と絲の臭をさせる事は二次的である然し固くなく量も多く書いて戴く事は歓迎し諸兄の御寄稿を希望してやまない。上田市の記事は現在でも多過ぎると云ふ人もあれば又千枚氏の様にもつと増加してはどうかと云はれる方もある。せいゝ御趣意に副ひ度いと思つてゐる。編輯室にも方針があり何んども註文に應ずると云ふ譯には行かぬがよいと思つた事は採用するに吝なるものでない。然し校務の寸暇を割いての仕事故餘り手数の掛る事は、幾らよ考へても實行出来な

御來店のお土産は
みずび飾 上ノフルーツ
香ゼリ チョコレート
香水飾 黒羊羹
呑水飾 クルミ羊羹
信濃そば 果物類 備詰
上田市松尾町
上飯島商店
電話二六〇二五四

御宴會に御會食に
レストラン
香青軒
明朗な洋室 落付いた
和室(數室)
上田市袋町 電話13番

千曲會指定旅館
上村ホテル
上田市海野町
電話三二七番

旭工業商會
正會員 飯島貞雄
東京市芝區田村町三ノ七
電話芝(四三)一七二八

坂路商店
電話一二〇九番
振替口座東京云云九番
設計請負
高崎市赤坂町七六番地

式煮繭機
式多條機
特許T M式ストーカー
特許T M式コールセンター
製絲機械器具一般